

# 海のかなた

小川未明

青空文庫



海うみに近ちかく、昔むかしの城跡しろあとがありました。

波なみの音おとは、無心むしんに、終しゆうじつ日岸じつしの岩角いわかどにぶつかつて、砕くだけて、しぶきをあげていまし  
た。

昔むかしは、このあたりは、繁華はんかな町まちがあつて、いろいろの店みせや、りっぱな建物たてものがありました。  
たのですけれど、いまは、荒あれて、さびしい漁村ぎよそんになっていました。

春はるになると、城跡しろあとにある、桜さくらの木きに花はなが咲さきました。けれど、この咲さいた花はなをながめ  
て、歌うたをよんだり、詩しを作つくつたりするような人ひともありませんでした。ただ、小鳥ことりがきて、  
のどかに花はなの咲さいている枝えだから枝えだに伝つたつてさえずるばかりでありました。

夏なつがきてても、また同じおなじでありました。静しずかな自然しぜんには、変かわりがないのです。日暮ひぐれ方がた  
になると、真まつ赤かに海うみのかなたが夕焼ゆうやけして、その日ひもついに暮くるるのでした。

いつ、どこからともなく、一人ひとりのおじいさんが、この城跡しろあとのある村むらにはいつてきまし  
た。手てに一つのバイオリンを持ちもち、脊中せなかに箱はこを負おつていました。

おじいさんは、上じやうず手にバイオリンを鳴ならしました。そして、毎まい日にちこのあたりの村むら  
々らを歩あるいて、脊せに負おつている箱はこの中なかの葉くすりを、村むらの人ひとたちに売うつたのであります。

こうして、おじいさんは日の照る日中は村から、村へ歩きまわりましたが、晩方にはい  
つも、この城跡にやってきました、そこにあつた、昔の門の大きな礎石に、腰をかけた  
た。そして、暮れてゆく海の景色をながめるのでありました。

「ああ、なんといい景色だ。」と、おじいさんは海の方を見ながら、ため息をもらし  
ました。おじいさんは、この海の暮れ方の景色を見ることが好きでした。

つばめはしきりに、空を飛んで鳴いています。船の影は、黒く、ちようど木の葉を浮か  
べたように、濃く青い波間に見えたり、隠れたりします。そして、真っ赤に、入り日の名  
残の地平線を染めていますのが、しだいしだいに、波に洗われるように、うすれていっ  
たのであります。

おじいさんは、ほとんど、毎日のようにここにきて、同じ石の上に腰を下ろしました。  
そして、沖の暮れ方の景色に見とれていました、そのうちに、バイオリンを鳴らすので  
した。

おじいさんの弾くバイオリンの音は、泣くように悲しい音をたてるかと思うと、また笑  
うようにいきいきとした気持ちにさせるのでした。その音色は、さびしい城跡に立つて  
いる木々の長い眠りをばさましました。また、古い木に巣を造っている小鳥をばびつくり

させました。そして、しまいには、うす青い、黄昏の空にはかなく消えて、また低く岸を打つ波の音にさらわれて、暗い奈落へと沈んでゆくのでした。おじいさんは、自分の鳴らす、バイオリンの音に、自分からうつとりとして、時のたつのを忘れることもありませんた。

夏の日の晩方には、村の子供らがおおぜい、この城跡に集まってきて石を投げたり鬼ごっこをしたり、また縄をまわしたりして遊んでいました。子供らは、はじめのうちは、おじいさんの弾くバイオリンの音を珍しいものに思っ、みんなそのまわりに集まって聞いていました。

「いい音がするね。」

「学校のオルガンよりか、この音のほうがいいね。」

子供らは、たがいに、こんなことをいいあっていました。

おじいさんは、あるときは、子供らを相手にいろいろな話もしました。しかしみんなは、おじいさんの弾くバイオリンの音に慣れ、またおじいさんの話にも聞き飽きると、いままでのように、おじいさんのまわりには寄ってきませんでした。

「薬売りのおじいさんが、また、あすこで鳴らしているよ。」と、一人の子供がいうと、

「稽古をしているのだよ。」と、他の一人の子供がいました。

「稽古でない、海の景色がいいから、見てうたっているのだよ。」

「そうでない、ねえ、稽古だねえ。」

子供らはいろんなことをいつて、議論をしましたが、また、そんなことは忘れてしまつて、みんなは遊びに夢中になりました。

ひとり、松蔵という少年が、この中におりました。この少年の家は、貧乏でありました。彼は、他の子供らが騒いだり、駆けたりして遊んでいましたのに、ひとりおじいさんのそばへきて、熱心にバイオリンの音を聞いて、感心していました。

いつしか、おじいさんと、この少年とは仲よくなりました。

「どうして、こんないい音が出るのでしょうか。」と、松蔵は、不思議そうにおじいさんに向かつてたずねました。

「坊は、音楽が好きとみえるな。」と、人のよいおじいさんは、少年の顔を見ながら、笑っていました。

「聞いていると、ひとりでに涙が出てくるの……。」

「ははは、坊も、私のお弟子になつてバイオリンが弾きたいかな。」と、おじいさんはい

いました。

「おじいさん、どうか僕ぼくに、バイオリンを教おしえてください。」と、少しょうねん年は、熱ねっしん心に、目めを輝かがやかして頼たのみました。

それから、おじいさんは、自じぶん分のバイオリンを少しょうねん年に貸かして、弾ひく方ほう法ほうを教おしえてやりました。

松まつぞう蔵ぞうは、おじいさんから、バイオリンを教おそわることをごんなにうれしく思おもつたでしょう。そして、毎まい日にち、日暮ひぐれ方がたになると、城しろ跡あとにいつて、いつもおじいさんの腰こしかける石いしのそばに立たつて、おじいさんのくるのを待まっていました。

「なかなかよく弾ひけるようになった。」といつて、おじいさんは、松まつぞう蔵ぞうの頭あたまをなでてくれることもありました。

夏なつも、もはや逝ゆくころでありました。おじいさんは、ある日ひのこと、松まつぞう蔵ぞうに向むかって、「坊ぼうや、おじいさんは、もう帰かえらなければならぬ。こんど、いつまた坊ぼうにあわれるかわからない。坊ぼうは、きつと上じょうず手てなバイオリンの弾ひき手てになるだろう。私わたしのかたみに、このバイオリンを坊ぼうに置おいてゆく。坊ぼうは、このバイオリンで私わたしがいなくなつてもよく、稽古けいこをしたがよい。」といつて、バイオリンを松まつぞう蔵ぞうにくれました。

少年は、どんなに喜んでありましょう。また、おじいさんに別れなければならぬのを、どんなに悲しく思ったでありましょう。

おじいさんは、船に乗って、遠く、遠くいつてしまいました。少年は、おじいさんの故郷を知らなかつたのです。ただ、このとき、海の上を望んで悲しんでいました。おじいさんに乗せた船は、夕焼けのする、紅い海のかなたに消えてゆきました。少年は、果てしない、その方を見やって、ただ悲しみのために泣いていました。

毎日、入り日は、紅く海の上を彩りました。そして、城跡から、海をながめるその景色に変わりはなかつたけれど、おじいさんの姿は、もはや、どこにも見る事ができませんでした。

少年は、おじいさんが、腰かけた石のところをやってきました。ありありとおじいさんが、いつもものように、小さな箱を脊中に負って、バイオリンを持って、石に腰をかけている姿が見えたのです。

「おじいさん！」

少年は、こう呼びました。しかし、応えはありませんでした。

彼は、自分の手に、いまおじいさんの持つていたバイオリンのあるのに、はじめて気づ

きました。そして、おじいさんは、海のかなたへいつてしまったのだと知って、かぎりなく悲しかったのです。

彼は、その石に腰をかけました。また小さな姿で、その石の上に立ちました。そうして沖の方を向いて、おじいさんから教えてもらったバイオリンを弾くのでした。

少年は、おじいさんのことを思うと、胸がいつぱいになりました。いつしか自分の弾いているバイオリンの音は、悲しい響きをたてていたのでした。

海鳥は、しきりに鳴いています。頭の上の松の木を渡る風の音まで、バイオリンの音に心をとめて、しのび足して過ぐるように思われました。

いつしか、村の子供らまで、松蔵の弾くバイオリンの音を、感心して聞くようになりました。

松蔵は、おじいさんがいなくなっても毎日のように、城跡の石のところにきて、おじいさんがしたように、沖の方をながめながら、熱心にバイオリンの稽古をしたのであります。

けれど、ここに思いがけない不幸なことがもちあがりました。松蔵の家が、貧乏のために、いつさいの道具を競売に付せられたことでありま

す。もとよりなにひとつめぼしいものがなかつたうちに、バイオリンが目立ちましたので  
すから、この松蔵にとつてはなによりも大事な楽器を奪い去られてしまいました。そし  
て、バイオリンは他のがらくたといつしよに車につけて、どこへか運び去られました。  
車が、でこぼこの道をゆきますと轍がおどつて、そのたびにバイオリンは車の上から悲  
しいうなり音をたてたのであります。

松蔵は、目に、いっぱいの涙をためて車の行方を見送つていました。しかしそれをど  
うすることもできなかつたのです。

こののちは、自分が、できるだけ働いて、自分の力でそれを取り返すよりは、ほかに途  
がないことを感じました。

松蔵は、あの忘れがたいおじいさんのかたみである、そして、自分の大事なバイオリ  
ンを取り返すためには、どんな苦勞をもいとわないと決心しました。それから、松蔵  
は、小さな体で堪えるだけの仕事はなんでもしました。工場にいつても働けば、家にて  
も働き、また、他人の家へ雇われていつても働きました。寒い冬の夜も、また、暑い夏の  
日盛りもいとわずに働きました。そして、自分の家のために尽くしました。また、もう一  
度、失つたバイオリンを自分の手に買いもどして、それを弾きたいという望みばかりであ

りました。

けれど、あのバイオリンが、はたして、自分の手にもどってくるか、どうかということ  
は、まったくわかりませんでした。もしかだれか、知らぬ人の手に渡ってしまつて、ふた  
たび自分の手に返るようなことはないと考えましたときは、彼は、どんなに悲しみ、もだ  
えたでありましょう。

けれど、あのバイオリンは、きつと、いつか自分の手にもどってくるにちがいないと信  
じますと、また、彼の瞳は、希望の光に輝いたのであります。

三年の後、彼はとうとうバイオリンを、買ひもどすだけの金を持つことができました。

「これから、自分は、バイオリンを探して旅立ちしよう。」

松蔵は、城跡の石のところにきました。そして、海の方をながめて、祈りました。

「どうか、あのなつかしいバイオリンが、私の手にもどってきますように。」と、祈りま  
した。

空を鳴きながら飛んでいるつばめは、彼のいうことを聞きました。そして、この憐れな  
少年に同情するごとく、くびを傾けてながめていました。

少年は、両親や、姉妹に別れを告げました。

「わたしは、旅をして、りつぱな音楽家になつて帰ります。」

そういつて、彼は、故郷を立ち出たのです。

それから、彼は、あちらの町、こちらの町とさまよつて、バイオリンを探して歩きました。

また、バイオリンを弾く家の前に立つては、じつとその音に耳を傾けました。弾いている人にどれほどの技倆があるう。弾いているバイオリンは、なつかしい自分のものであつたバイオリンではなからうか？ と、かたときも自分の志と、バイオリンのことを忘れませんでした。

少年は、おじいさんのしたように、薬売りになつたり、筆や、墨を売る行商人になつたりして、旅をつづけました。

ただ一つ、そのおじいさんの持つていたバイオリンにめぐりあうのに、頼みとするのは、小さな星のような真珠が、握り手のところにはいつていたことです。少年は、ふるさとに近い町の道具屋は一軒のこらずにきいて歩きました。

「真珠の小さな珠が、握り手にはいつているバイオリンは出ませんでしたか？」

どこかこの近くの古道具屋に、そのバイオリンは売られたと思つたからです。そして、

まだ、その店のすみに残つていやしないかというかすかな望みがあったからでありました。すると、一軒の道具屋は、いいました。

「なんでも、そんなバイオリンを三年ばかり前に買ったことがあります。店にかけておく  
とある日、旅の人が前を通りかかつて、そのバイオリンを見て、ほめて買ってゆきました。  
どこの人ともわかりませんが、なまりで西の方の国の生まれだということはわかりました。  
もう、そのバイオリンはどこへいったかわかるものでありません。」

松蔵は、そう聞くと、がっかりしました。

「その人は、どちらへいったでしょうか。」と行って、ため息をつきました。

道具屋の主人は、笑いました。

「なんで、そんなことがわかるのですか。しかし、いまごろは、あの買った人も、また  
どこかの古道具屋へ売ってしまったかもしれない。あなたが、そんなにほしいものなら、  
幾年もかかつて探してみなさるのですね。しかし、そんなことはむだなことかもしれま  
せん。」と、主人はいいました。

「私には、あのバイオリンでなければ、けつして出ない音があります。命をかけても探さ  
なければなりません。もしあのバイオリンが見つからなかったら私は、もう生きているか

「いもないのです。」と、少年はいいました。

これを聞くと、主人は、目を丸くしてびっくりしました。

「あなたが、そんなに熱心なら、きつと見つかるときがあるでしょう。」といいました。少年は、その言葉に勇気づけられました。そして、あてなき旅をつづけたのであります。

その後、幾たび、幾百たび、いろいろな古い道具を売る店にはいつて、バイオリンを聞いたでしょう。また、あるときは、風の絶え間にどこから聞こえてくるバイオリンの音色に耳を傾けて、もしか、だれか自分の持っていたバイオリンを弾いているのではないかと思ったりしました。

そのバイオリンの音は、じつにいい音色でした。そして、それを弾いている人は、けっして下手ではありませんでした。けれど、彼は、自分のおじいさんからもらった、バイオリンには、けっして、他のバイオリンにはない、音色の出ることを感じていました。

「あのバイオリンじゃない。」

彼は、がっかりしました。

明くる日も、また明くる日も、少年は、旅をつづけたのであります。

春はるの日ひの雨あめ催もよおしのする暖あたたかな晩方ばんがたでありました。少年しょうねんは、疲つかれた足あしを引きひずりながら、ある古ふるびた町まちの中なかにはいつてきました。少年しょうねんは、あちらの空そらのうす黄色きいろく、ほんのりと色いろづいたのが悲かなしかったです。

雨あめになるせいか、つばめが、町まちの屋根やねを低ひくく飛とんでいました。このとき、少年しょうねんは、疲つかれた足あしを引きひずりながら、まだ家いえの内うちには、燈とも火しびもついていない、むさくるしい傍かたえの軒のきの低ひくい家いえの前まえにさしかかりますと、つばめが三羽ば、家いえの内うちから、外そとの往來おうらいに飛とび出だしました。それと同時に、ブーンといつて、バイオリンの糸いとの鳴なり音おとがきこえたのであります。

少年しょうねんは、はつと心こころに思おもいました。なぜならその音色ねいろは、きき覚えおぼえのあるなつかしい音色ねいろでありましたからです。

もうすこしのことに、気きづかずに通とおり過すぎようとしましたのを、彼かれは立たち寄よって、その古道具屋ふるどうぐやをのぞいてみました。それは、つばめが、止とまっていて、飛とび立たつときに、その糸いとを鳴ならしたとみえます。そこには、バイオリンが一ちようすすけた天てんじようからつるさ

れていました。彼は、よく見ると、それに小さな光る星のような、真珠がはいっていたのでした。

「あ！」と、声をたてて、少年は、喜びに、狂わんばかりでありました。そしてさっそく、このバイオリンを買って、自分の腕に奪うように抱きました。まさしく、三年前に失くしたおじいさんのくれたバイオリンでありました。

黄昏方の空に、つばめはないています。そのつばめの鳴く声は故郷の海岸の岩鼻でなくつばめの声を思わせました。

「ああ、つばめが、私に、教えてくれたのだ。」と、うす明かりの下で、バイオリンを抱いて少年は、つばめの飛んでゆく北の空をながめていました。

松蔵は、唄うたいとなりました。かつて、おじいさんがそうであつたように、脊中に、小さな薬箱を負って、バイオリンを弾きながら、知らぬ他国を旅して歩いたのです。

入り日は、赤く、海のかなたに沈みました。彼は、その入り日を見るにつけて、おじいさんのことを思わずにいられませんでした。旅するうちに、幾たびか月日はたちました。

松蔵は、青年となつたのです。けれど、彼は、どうかして一度、海を渡って、あちらにある国にいつてみたいという希望を捨てませんでした。

ある年の初夏のころ、彼は、ついに海を渡つて、あちらにあった大島に上陸しました。

そこには、いまいろいろの花が、盛りと咲いていました。

彼はその島の町や、村でやはり薬の箱を負つて、バイオリンを鳴らして、毎日のように歩いたのです。こんど、彼は、おじいさんを探ねなければなりません。

彼が、バイオリンを鳴らしながら道を歩くと、村の子供たちが、男となく、女となく、みんな彼の身のまわりに集まつてきました。

「ああ、この人だ。この人だ。」

「私に、どうかバイオリンを教えてください。」

「わたしにも……。」

子供らが、こういつて、口々に頼みましたばかりでなく、親たちまで家の外に出て、松蔵をながめていました。

「どうしたことか？」と、彼は、不思議に思いました。すると、一人の子供が、

「私たちのおじいさんが、死になさる前に、もし真珠の星のはいったバイオリンを弾いてきた人があつたら、第二の私だと思つて、その人から、バイオリンを教えてください」とい

われたのです。」といたしました。

彼は、このことを聞くとがっかりしました。なつかしいおじいさんに、もう永久に  
あうことができなかつたからです。それから彼は、花の咲き、ちようの飛ぶ中で、みんな  
に音楽を教えてやりました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「週刊朝日」

1924（大正13）年1月

※表題は底本では、「海《うみ》のかなた」となっています。

※初出時の表題は「海の彼方」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海のかなた

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>